



TITLE:

フランス植民帝國の問題 - 第二次 世界大戦前における -

AUTHOR(S):

河野, 健二

CITATION:

河野, 健二. フランス植民帝國の問題 - 第二次世界大戦前における -. 經濟論叢 1942, 55(2): 226-240

ISSUE DATE:

1942-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131700>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷五十五第

月八年七十和昭

論 叢

全體主義的經濟論理……………

經濟學博士 柴 田 敬

戰時船舶全面的徵發への行程……………

經濟學士 佐 波 宣 平

強制カルテルについて……………

經濟學士 靜 田 均

時 論

世界的論理の轉換者日本……………

經濟學博士 石 川 興 二

研 究

マルサス『人口論』の人間觀的基礎……………

經濟學士 白 杉 庄 一 郎

二つの型の現金殘高……………

經濟學士 一 谷 藤 一 郎

フランス植民帝國の問題……………

經濟學士 河 野 健 二

說 苑

近世絹織業の分析視角……………

經濟學士 堀 江 英 一

附 錄

彙 報

フランス植民帝國の問題

——第二次世界大戰前における——

河野 健 二

一 フランス植民帝國と大英帝國

歐洲における最初の大植民帝國は、周知のごとく十六世紀において先づスペイン人によつて建設された。スペインはポルトガルと相並んでその世界支配を打ち樹てたが、次いでその遺産はオランダ人によつて引繼がれることとなり、之と時を同じくしてフランスはスペインに對する勝利に基づいて、スペイン人の世界支配の事業を繼承せんとし、こゝに十七世紀を特色づけるフランスとオランダの勢力争ひが成熟した。他方、イギリスは十七世紀において重商主義國家として自らを整備しつゝ擡頭したり、かくしてフランスとイギリスの世界政策の衝突はこゝに十八世紀における激烈な植民地獲得戦となり、結局イギリスが最後の勝利を得て、大英植民帝國の建設を完成し、フランスはイギリスに次ぐ植民帝國として世界支配に参加することゝなつた。

十九世紀の世界經濟は、かうした重商主義諸國の爭覇戦の結果として形成された。それは自由主義經濟時代の名をもつて呼ばれるが、しかしそれは前世紀に於けるイギリス、フランスひいては歐洲全體の手による世界支配を基礎地盤として、始めて可能となつたものに過ぎない。自由經濟、自由貿易なる合言葉の裏には、世界經濟における英・佛ひいては歐洲全體の事實上の優越が隠されてゐたわけである。歐洲列強による世界分割は、十九世紀においても著しく進行したが、特に十九世紀の最後の四半世紀に入つて、世界經濟の主流が自由貿易から帝國

主義へ轉換するとともに、植民地獲得競争は益々激化するに至り、世界の隅々に及ぶまで分割が行はれた。イギリスは面積においても人口においても世界の四分の一を領有し、フランスは世界の五大大陸に互る領土を自己の手に収めて、イギリスに次ぐ世界最大の植民國家と成り、歐洲による世界支配の代表者たる地位に登つた。

このやうに十九世紀の世界經濟は、イギリスとフランスを中心として構成せられ、それを基礎地盤とすることによつて世界的均衡の一應の成立を見るに至つた。然しかゝる均衡狀態は當時のイギリス人・フランス人が考へてゐたやうな永久不變のものでは決して無く、それ自身の裡に矛盾を内包してゐたものであつた。資本主義生産の發展は、イギリス、フランス以外の歐洲外世界の工業化を當然に呼び起すこととなり、このことは同時にイギリス、フランスにとつて市場喪失を意味したからである。二十世紀の到來とともに嘗ての世界均衡は再び動搖を開始した。第一次世界大戰の結果として日本および合衆國の地位が著しく向上するに至つたことは、もはや歐洲が世界の唯一の中心ではなくなつたことを意味するものであり、世界恐慌の蔓延は從來とは逆に本國の植民地に對する依存關係を一層強化せしめ、その故にまた植民地を繞る紛争を更に深刻ならしめ、歐洲の覇權は動搖し始めたのである。アンドレ・シエグフリードの言つてゐるやうに『歐洲は、それが自らのものとし來つた準獨占を今はや認めやうとしない新たな敵手に直面して、今やその優越權ではなくして、その生存權を主張することを餘儀なくされてゐる。』¹⁾したがつて二十世紀におけるイギリス、フランスの問題は最早その十九世紀的な覇權を回復することにはなくして、如何にしてその存在を續けるかに在つたわけである。フランス植民帝國といふ言葉が事新らしく用ひられ始めたことは、十九世紀的なフランスの海外領土を再編成して、二十世紀の現實に對處しようとする帝國主義的な要求を表明するものであつた。

1) André Siegfried, La Crise de l'Europe. 1935, p. 9.

さて、一九三〇年におけるイギリス、フランスの世界分割の様相は、ラドー『世界政治經濟精圖』によれば次の如くであつた。²⁾

	面積(百萬平方哩)	人口(百萬人)
大英帝國	一八・一一一	四八・六七
フランス帝國	四・八三二	一〇・二一
全世界	四七・九三八	一七九・七

この二つの植民帝國のうち英帝國は言ふまでもなく世界最大の植民國家であるが、その構造は事實上は聯合國家に他ならず、帝國と言ふよりは寧ろ超帝國的な構造をもつものであつた。英本國はカナダ・濠洲などの自治領に對しては平等の關係に立ち、自治領と相並んで上位構造たる大英帝國を構成してゐるからである。然し、大英帝國の構造上の特質は單にこれのみに盡きるものではない。注意すべきことは、平等の成員たる英本國が謂はゆる王冠植民地その他の屬領に對しては、眞に本國としての優越的な立場に立つて之を支配してゐたといふ事實である。主として有色人種より成る之等の植民地こそ英本國の實質的な地盤としての役割を果しつゝ、大英帝國の眞實の支柱となつてゐたのである。大英帝國は正しくこのやうな二重の構造において存在したものであつた。³⁾

英帝國がこのやうに構造上の二重性において存在したのに對して、フランス植民帝國は元來一つの構造しか有たなかつた。フランス帝國はフランス本國を唯一最高の中心として、その領土のすべてを植民地もしくは之に準するものとして保有することによつて構成されてゐたからである。言ひ換へれば、フランスの植民地はそのすべてが開發あるひは投資植民地であつて、カナダ・濠洲の如き白人の移住植民地を有たなかつたのである。随つてフランス植民帝國は、これを自治領以外の大英帝國と比べると構造的な類似性をもつと言ふことが出来る。英帝國において、眞の意味で植民國家と呼べるべき部分が、自治領以外の部分であるとするならば、フランス植民

2) ラドー著藤澤保太郎氏譯、世界政治經濟精圖、8頁。
3) 鈴木成高氏著、歴史的國家の理念、63頁。

帝國こそは正に完全な植民帝國であると言ふことが出来るであらう。いま、面積・分布地域・住民・産物の四點についてこの兩者を比較すれば、大英帝國とフランス帝國の差違は實に印度に存することがわかる。モオリス・グエルニエの説明によれば次の如くである。⁴⁾

一、面積

英本國、屬領、王冠植民地計(印度および自治領を除く).....

フランス本國、植民地、保護國その他.....

一〇、五〇〇、〇〇〇
一、六〇〇、〇〇〇

この裡でサハラ沙漠地帯を除外すれば兩帝國の面積は殆んど相等しい。

二、分布

アメリカ大陸。極めて類似してゐる。英領ギヤナ、佛領ギヤナ、アンティユ諸島。

アジア及び太平洋。ビルマ・マレー聯邦は佛領印度支那に比敵する。英領オセアニア諸島は佛領よりも重要。

アフリカ大陸。重要性において相比敵する。位置は對稱的であり、佛領は北・西部、英領は南・東部を占める。

三、住民

兩帝國共に未開内至は半開の住民を擁してゐる。佛領印度支那政策におけると同様の困難が、ビルマ・海峡植民地において見られる。

四、産物

小麥。北アフリカと英領ケニヤ高地帯。棉花。佛領西アフリカと英領エジプトスダン。

護謨。兩ギヤナ、佛領赤道アフリカとニジエリヤ、佛領西アフリカと英領エジプトスダン、タンガニカとローデシヤ。

玉蜀黍。北アフリカ、印度支那、英領エジプトスダン、ケニヤ。

米。ギヤナ、佛領西アフリカ、マダガスカル、印度支那、英領ギヤナ、シエラ・レオン、海峡植民地、ビルマ。

甘蔗。アンティユ諸島、佛領および英領ギヤナ、印度支那、フイジー。

獸類。北アフリカ、佛領西アフリカ、マダガスカル、印度支那、ケニヤ、タンガニカ、ウガンダ。

4) Maurice Guernier, *Essay sur une politique économique de l'Empire français*. 1937, p. 38.

(註) 議談については疑問があるが、原著にしたがつておく。

歴史的性格を等しくして成立した英・佛兩植民帝國は、印度を別とすれば、又その面積・分布・住民等に於いても、極めて相似た性質を有つてゐたことがわかる。随つてこの限りに於いて大英帝國のフランス帝國に對する優越は、實にそれが印度を擁してゐる點に在ると考へられる。逆に言へば、フランス帝國は印度を持たなかつたが故に、大英帝國よりも劣位に在つたと言ふことが出来る。然しながら、このことは單に表面的な事實に就いてのみ言はれ得るに過ぎないのであつて何等かの結論をこゝから導くことは危険であると言はねばならない。こゝでは單にフランス帝國の大體の輪郭を大英帝國と比較して述べたに過ぎないからである。次に、フランス帝國の内部に立入つて、そこに於ける經濟關係がどのやうであつたかを見ることゝしよう。

二 フランス植民帝國の經濟關係

一九三七年におけるフランス本國の總貿易額は六六、二五〇百萬フラン(切下げによる影響を除く)であつたが

年	輸				年	輸			
	對外國	對帝國	對外國	對帝國		對外國	對帝國	對外國	對帝國
一九二七	一、九二七	六、〇六六	四七、〇八	八、三三四	一九三二	二、三、五五	六、三三	一、三、〇二	六、〇五
一九二八	一、九二八	五、〇五五	四七、〇〇	九、三〇三	一九三三	二、七、〇〇	六、七〇	一、三、八五	六、九九
一九二九	一、九二九	五、二二	四七、〇九	九、四九	一九三四	二、七、五三	五、八四	一、三、三六	五、五二
一九三〇	一、九三〇	六、五二〇	三、九四	八、八五	一九三五	一、五、六三	五、六三	一、〇、六三	四、九四
一九三一	一、九三一	六、一七	三、二七	七、一六	一九三六	一、八、一六	七、五三	一、〇、三八	五、六四

最大の供給先であり、その他に印度支那は十四位から六位に、モロッコは十七位から十三位に、チュニス十六位から十四位に、西アフリカは十一位から七位にと上昇してゐる。一九三七年における主なる貿易相手先の順位は次の如くである。⁴⁾ (單位=百萬フラン)

輸出 先		獨逸		輸入 先		印度支那	
アルジェリア	三、六九(三・七)	オランダ	八三(三・四)	合衆國	四、〇〇(九・五)	西アフリカ	一、五〇(三・〇)
ベルギー	三、一四(三・一)	チュニス	七九(三・三)	アルジェリア	三、八〇(九・〇)	暹羅	一、二六(三・〇)
ルクセンブルグ	三、一四(三・一)	印度支那	七九(三・一)	英國	三、八〇(八・〇)	印度	一、二六(二・七)
英國	二、七二(二・三)	伊太利	六〇(二・六)	獨逸	三、四七(七・七)	オランダ	一、〇五(二・五)
合衆國	一、五五(六・四)	總計	三、九五(一〇・〇)	ルクセンブルグ	三、〇七(七・三)	總計	四、二六(一〇・〇)
スイス	一、四四(六・〇)						

次に、フランス本國貿易の商品別の構成はどうであつたであらうか。一九三五年における状態を對外國と對植民地とに區別してみれば、左表のごとくである。⁵⁾ (單位=百萬フラン)

輸入 外國より 佛領より		輸出 外國へ 佛領へ	
食料品	二、一五	食料品	一、四六
原料品	九、九四	原料品	三、七四
製造品	三、五七	製造品	五、三二
合計	一五、六六	合計	一〇、九二

つてゐる。本國の植民地への輸出においては、その六九%が製造品であり、本國の製造品輸出中の三八%が植民地へ送られてゐる。このやうに植民地は食料品の供給地として、又製造品の販賣先として本國經濟に貢獻してゐたのであるが、その主なる内譯を見るに次の如くであつた。⁶⁾ (單位=百萬フラン)

4) Pierre Lequime, Ibid., p. 29.
5) Maurice Guernier, Ibid., p. 47.
6) Maurice Guernier, Ibid., p. 48.

食料品の輸入

外國より	生獸	肉類	油脂類	飲料	穀類	米	早生	實生	藏粉、野	砂糖類	合計
佛領より	二〇	二三	一四	七	二〇三	三	三	三	五	一七	二、二六
	二六	二九	九	一、五五	八四	二〇三	二二	一、六四	三三	三三	四、〇一

製造品の輸出

外國へ	化學品	機械器具	自備車	綿織物	糸・織物計	衣料品	美術奢	子器硝	製品	紙製品	合計
佛領へ	一、一九	二、八	二、八	二二	一、三三	一五	一五	四	六	二九	五、三二
	三、六	三、三	三、三	六、六	六、三	六	六	六	六	二、一	三、三三

製造品の輸出においては綿織物の植民地向け輸出を特に注意すべきである。それはフランスの綿織物の總生産額の二八%を占め、恐慌による國內市場および外國市場の梗塞を補つて、その役割を著しく高めてゐる。植民地產原料品の本國輸入は、之に反し極めて低調であり、フランス植民帝國の脆弱性の一つは、植民地における工業原料品の稀少に在つたといふことを想像することが出来る。輸入原料品の主なるものは次の如くである。(單位=百萬フラン)

原料品の輸入

外國より	羊毛	棉花	麻類	織物類	金屬類	石炭	石油	製紙	鐵物・	獸皮	製油・果	合計
佛領より	一、一五	一、〇五	三、〇五	二、八七	六、六	一、九〇	一、一	三、五	一、五	三、一	六、六	九、九六
	二、一	二、七	六、七	二	二	二	一	一	七	元	五、六	一、三三

以上、フランスを中心とするフランス植民帝國内の經濟關係を概觀した。植民地向けの資本輸出に就いては詳細を知り得ないが、大戰前におけるフランスの海外投資額の總計は四〇〇億フランであつたが、大戰後ロシヤ、中南歐において有した投資額の大部分を喪失した結果として、植民地に對する投資が一層重要性をもつに至つた

7) Maurice Guernier, Ibid., p. 50.

8) Guy Lacam, Inventaire économique de l'Empire, 1938, p. 27.

ことは容易に想像されるところである。一九三〇年末における帝國內への投資額は、政府投資が一・二億フラン、個人投資が三〇〇億フランで合計四一〇億フランに上つたと言はれてゐる。⁹⁾

三 フランス植民帝國の問題

『帝國の問題は新たな問題であり、しかも現實の問題である。それは、いかなる意味においても傳統的な植民政策の延長たるべきものではあり得ない。フランスにとつて此の問題は世界經濟の最近數十年の發展の論理的な歸結なのである。』¹⁾ 上述したやうな經濟關係において存在したフランス植民帝國は、二十世紀における歐洲の危機さらに直接的には第二次世界大戰の危機に直面して、新たにその世界支配の秩序を再編成する必要に迫られたのであるが、それは、もはや既存の經濟關係を踏襲し、その存続を圖ることとは別個の問題でなければならなかつた。自然的な植民活動の結果として存在したこれらの經濟關係をむしろ批判することによつて、意識的に植民帝國を建設しようとする帝國主義的な要求が再び有力に主張され始めたのである。いま、かうした見解を採り上げて、それが問題にした諸點とそれが用意した諸方策とを概観しよう。

フランス帝國における問題を便宜上、生産と消費と交換の三方面から眺めるならば、先づ生産に就いて、帝國內の産業は通常これを補完産業 (Productions complémentaires) と競争産業 (Productions concurrentes) の二つに分けて考察される。²⁾ 前者は、その發達が本國および植民地のいづれの産業をも害しないものを指し、後者は本國あるひは植民地の利益を害する産業を指すものと言はれてゐる。しかし補完産業か競争産業かの區別を決める基準は、事實上は常に本國の産業を中心として決定されたのであり、従つてかゝる區別そのものも客觀的なものでは在り得

9) Charles Richon, La production coloniale et le crédit. 1931, p. 121.
1) Maurice Guernier, Ibid., p. 1
2) Maurice Guernier, Ibid., p. 69, 81.

なかつた。この二種類の産業のうち、補完産業はその生産を奨励し、競争産業はその生産を抑制すべきものであつたことは言ふまでもない。

補完産業に於いては本國に成立するものと、植民地に成立するものとを二つを區別することが可能である。本國に成立する補完産業は言ふまでもなく製造工業であつた。ところで本國商品の植民地向け輸出は、恐慌以來かなりの減退を示し、之に比して本國の植民地からの輸入が著しく増大して、本國の植民地に對する依存の傾向が生じてゐたことは既に前述した。逆に言へば『植民地は本國から僅かしか購入しないで、然も多くを賣り付ける』³⁾と言ふ状態に立到つてゐたわけである。従つて本國の製造工業品の植民地向け輸出を如何にして増加せしめるかが重大な關心事とされたわけである。

植民地の對本國貿易(各植民地の全輸出全輸入をそれぞれ一〇〇とする。一九三四年)									
西アフリ	マダガス	赤道アフ	トーゴ	印度支那	マルチニ	グアドル	アルジェ	チュニス	
輸入	四六	七二	三八	一九	五六	六三	八一	七三	四九
輸出	七五	七七	五六	四三	四八	九七	八九	六〇	六六
						(一九三三年)	(同上)	(同上)	

かくの如く植民地の對本國貿易において、本國の占める割合は、印度支那とアルジェリアを除いて一般に輸入に於けるよりも輸出に於いて大であり、従つて植民地の輸入は外國商品に對して、かなりの流入の餘地を認めてゐたと言ふことが出来る。こゝに於いて植民地の外國品輸入を防遏して、本國品の輸入を増大せしめる方策が問題となるが、その内最も重要な方策として關稅制度の改革が問題となつた。フランス植民帝國の關稅制度は、各地域によつて異なつてをり、統一を缺いてゐるが、そのうち帝國主義的な同化關稅が施行されてゐる印度支那・マダガスカルと自由貿易が行はれてゐるモロッコとを採つて、その輸入貿易を比較するならば、前者に在つては

3) Maurice Guernier, Ibid., p. 70.

4) Maurice Guernier, Ibid., p. 70.

その著しい部分が本國からの輸入によつて占められてゐるのに比べて、後者に於いては全くその逆であつたことがわかる。⁵⁾

自動車	印度支那	マダガスカル	モロッコ
七七%	九一%	四四%	
パタ	七四%	六六%	四%
綿織物	九四%	九五%	四%
煙草	二五%	一〇〇%	四%

帝國經濟を強化するための一つの問題が、從來の關稅制度を改訂して、全植民地に對して封鎖的あるひは制限的關稅を實施するとともに、帝國内に於いては完全な自由通商を實現し、謂はゆる『帝國優先』(Préférence Impériale)の制度を樹立することに在つたわけである。⁶⁾

更に、關稅問題に關聯して重要なことは、外國との通商協定締結に際して從來はフランス本國が單獨で協定を締結したために植民地の利益が無視される危險があり、且つ締結された協定は、アルジェリアを除いた其の他の植民地へは當然には適用されなかつたために、植民地への適用を行ふにはその爲の特別協定が要求される状態に在つた。⁷⁾帝國主義的な見解はかうした現狀に對して、帝國經濟の一體化を強く主張したのである。

然し、本國商品の植民地への輸出を増大せしめることは、十九世紀以來の植民政策の傳統的な課題であつて、帝國經濟固有の問題ではなかつた。『第一次大戰によつてフランスは一つの發見をした。それは植民地の發見であつた。』⁸⁾と言はれる意味は、植民地に成立する補完産業とくに原料資源の開発が重要性を持つに至つたことを指したものに他ならない。かくして各種礦業生産物の獲得が第一の目標とされるのであるが、そのうち、石油・石炭・鐵・銅・鉛等がとくに重要であつた。フランス帝國の弱點は前にも述べたやうに之等の國防資源を缺いてゐた點に在つたからである。然し問題は之等の資源が全然その植民地内に存在しなかつたと言ふよりは、寧ろ全帝

5) Maurice Guernier, Ibid., p. 71.

6) Pierre Requime, Ibid., p. 178.

7) Pierre Requime, Ibid., p. 181.

8) H. Hauser, Colonies et Métropole, De la France d'avant Guerre à la France

國を一括する統一的な開發計畫とか資源調査とかを持たなかつたこと、及び資源の存在が確認されてゐてもその採掘が外國產物の競争により阻害されたこと、更に根本的には採掘そのものが個人企業に委ねられてゐたこと等の事情に基くことが多かつたと言はれてゐる。⁹⁾ 缺陷は従つて單にフランス帝國の自然的條件にのみ基いてゐたのではないことを知ることが出来る。次に、鑛業以外の補完産業には植民地特產品の生産が擧げられる。棉花・ゴム等の重要工業原料品のほか、コーヒ・果實・肉類等の食料品が之に屬するが、この點にはあまり重要な經濟問題はなかつたやうである。

以上の補完産業は、その發達を奨励すべき産業であるが、之に對して競争産業には、小麦その他の穀物・葡萄酒・ラム酒・砂糖などの農產物および敷物ブラシ・綿織物などの工業製品があり、これらは孰れも本國産業との關係よりして、その發達もしくは存続を抑制すべき産業であると言はれ、事實かうした帝國主義的な政策の下にさまざまの植民地悲劇が発生したのであつた。アルジェリアの葡萄酒、モロッコの小麦等がその例であるが、これらの產物は作物轉換あるひは品質轉換を餘儀なくされたのである。

帝國内における經濟關係の強化を齎らすところの傳統的な方策が、本國の植民地向け輸出の増大を圖るに在つたことに就いては前述した通りであるが、然しその爲には植民地の購買力が豫め存在してゐることが必要であつた。ところで植民地の購買力は、言ふまでもなくその輸出力に依存するものであるから、植民地の輸入力を高めるためには何よりも先づその輸出を増大せしめなければならぬと言ふ事になる。從來、植民地の輸出は専ら農產物の輸出に限られてをり、しかもそれによる利益は大部分が中間商人によつて奪はれてゐたために、植民地住民の購買力は殆んど上昇を見ない状態に在つた。かうした條件の下において植民の購買力を高めるためには、當

d'aujourd'hui. 1937, p. 488.

9) Pierre Requime, Ibid., p. 78.

10) Maurice Guernier, Ibid., p. 81.

11) André Marette, Le Problème de l'Industrialisation des Territoires Français

然に植民地工業を育成し、農業人口よりも工業人口を多數に創出する以外に方法が無いわけである。植民地の工業化がかくして問題になるわけであるが、然し綿業その他の近代工業を植民地に成立せしめるならば、それは本國工業との間に競争關係を作り出すこととなり、植民帝國の内部分裂を惹起す危険を生ずるであらう。かくして結局、植民地工業は上述した補完的生産物の加工業といふ範圍に止まらざるを得なかつたと言ふわけである。これは帝國經濟における一つの自己矛盾であつたと同時に帝國主義的な見解の限界を示すものであつたと言ふことが出来る。

次に、補完的生産を植民地において發展せしめるとして、その爲に必要な條件としては、先づ『植民地施設』(Outillage colonial)の問題があつた。洪灣・鐵道・運河等の交通設備のほか、農業における灌漑施設、工業における發電設備などが之であり、これらの施設は既に夙より各植民地において着手されてゐたところであるが、こゝにおいて最も困難な問題は、その經費支辨の問題であつた。植民地財政は窮迫し、公債發行もその限度に達してゐた状況の下に在つては、その財源を何處に求めるかが重要な問題であつた。一九三五年の帝國會議に於いても、この問題が採り上げられ、國家信用の力によつて植民地施設を行はんとしたが實現を見るに見らず、その後一九三七年の植民地金庫(Fonds colonial)に關する法律案において再びこの問題が採り上げられるに至つてゐることとは、問題の核心がかうした點に在つたことを示すものである。¹²⁾

生産の自然的條件の改善と並んで、次には社會的條件の改良が問題となる。かうした試みは從來のフランス植民地においては全く顧られなかつたところであるが、その内まづ第一に着手さるべきものとして生産者ないしは販賣業者の組織化の問題があつた。その例としては、北アフリカにおける農産物販賣組合があるが、之を除いては一般に生産は勿論、販賣の組織化すら全然行はれてゐない實狀であつた。

d'Outre-Mer. 1939, p. 41.

12) Pierre Requime, Ibid., p. 134.

13) Pierre Requime, Ibid., p. 147;

植民地において以上の諸施設が企てられるとともに、次には植民地と本國とを連繫する海上輸送を如何にするかが問題となる。植民帝國を建設するためには、帝國内の海運をフランス本國が獨占する必要があつた。ところがフランス海運は、船舶建造費が高く且つ多くの社會的負擔を負はされてゐたために、運賃において到底國際競争に對抗し得ない状態に在り、従つて帝國内の輸送を獨占するわけには行かなかつた。『フランス帝國内の海運を再組織し、全帝國的な機構によつて嚴重に統制（とくに運賃に關して）された海運獨占の擴張を圖ることが緊要である。』¹⁴⁾と主張される状態に在つた。

四 結 言

フランス植民帝國は、その成立に當つて、豫め一定の計畫をもつて構築されたものでは固より無かつた。それは個々の植民活動の總計として單に自然的に形成されたものに過ぎないからであつた。二十世紀において世界史の新たな展開とともに、元來、十九世紀的な秩序に他ならなかつたフランス帝國は、自らの陣營を整備し強化することによつて、新たな世界經濟の現實に對處しようとするのである。『世界は、事實、新たな均衡に向ひつつある。其處においては過去の規則とか傳統とかは、もはや通用しない。』¹⁾フランス植民帝國の問題は、かくして全く新たな問題として提出されねばならなかつた。上來述べ來つた帝國再建の諸方策は、このやうな帝國主義的な要求に導かれて主張されたものであつた。しかしてかゝる諸方策が實現されるためには、本國と植民地を包含する帝國的な組織を先づ形成する必要がある、現にさうした努力も種々拂はれて來たのであつた。

一九二三年に『北アフリカ會議』(Les conférences Nord-Africaines)が招集され、こゝに本國と植民地との矛盾を調整し、その結束を強化せんとする帝國的な會議が始めて開かれることとなつた。本會議は、本國の總理大臣と關

14) Maurice Guernier, Ibid., p. 121.

1) André Siegfried, Ibid., p. 85.

係各大臣のほかアルジェリア・チュニス・モロッコ・西アフリカの四代表によつて構成され、北アフリカにおける軍事的・政治的・經濟的共通問題に關して協議が行はれた。その後一九三五年には更にレヴァント諸國をも加へて『北アフリカ・地中海高等委員會』(Le Haut Comité méditerranéen et de l'Afrique du Nord)と改稱されるに至つたが、この會議は嘗て存在したもののうち最も完全で有力なものであつたと言はれてゐる。²⁾

地中海高等委員會は、フランス帝國内の一部地域のみを對象としたものであつたが、之とは別に帝國内の全領域を包含する組織體を建設せんとする要求も、早くから存在した。一九三三年の『植民地貿易會議』(Conférence du Commerce Colonial)および同年の『豫備會議』(La Conférence préparatoire)は孰れもかゝる意圖の現はれであつたが、かうした試みは一九三四年から翌一九三五年にかけて開催された『帝國會議』(La Conférence Impériale, officiellement: La Conférence économique de la France Métropolitaine et d'Outre-Mer)において一應實を結ぶこととなつた。

しかし本會議は『それは帝國内の一事件ではあつたけれども、帝國の制度ではなかつた』³⁾と言はれるやうに、實力も永續性も有つものではなく、何等の解決をも與へ得なかつた。然るに一方、一九三五年以後の國際危機は益々切迫しつゝあり、特にドイツとイタリアの力強い攻勢に直面して強力な帝國組織體を一日も早く設立するところが要望されてゐたのであるが、フランス政治の貧困と各植民地の反目が禍して、遂にかゝる要求を満足せしめ得ないままで、第二の世界大戰に突入しなければならなかつた。そして戰爭はフランスに關する限り、開戦は同時に敗戦であつたといふことが出来るけれども、しかもフランス植民帝國が、フランス敗戦後の今日においても尙ほ多くの問題を残してゐることは周く人の知るところである。本稿は今次大戰前におけるフランス植民帝國の問題を、帝國主義的な見解に従ひつゝ概観し、それに就いて一應全般的な視野をもたうと努めたものに他ならない。個々の特殊問題に關して、更に詳細な検討がなさるべきであることは勿論である。

2) Maurice Guernier, Ibid., p. 66. Pierre Requime, Ibid., p. 201.

3) Maurice Guernier, Ibid., p. 63.